

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(98)

私は三十代の頃、仙台から五葉山に通ってシカのことを調べた。当時、ニホンシカの生物学はほとんどわかっていなかった。私は宮城県の金華山でシカと植物の研究をして博士号をとり、研究意欲に燃えていた。

しかし、金華山のシカは人に馴れており、本当の意味での野生シカとはいえなかった。東北地方では唯一、岩手の五葉山にシカがいるというかすかな情報を頼りに、私は仲間と五葉山に訪れた。一九七六年のことである。

しかし、私も頑固なほうだ。大きなオスシカをみてハンターは「これは体重は百二十キロで、歳は四十歳くらいだべ」というので、「それは違いますよ」といって秤で測ると七十キロだったし、歯の年輪を調べてみると八歳だった。

農家の人は「んだべ、おちんちんから変だと思っただのさ。おちんちんのベゴは三歳くらいででかくなるもの」。そしてハンター

とともに雪の中を歩き、数百頭のシカを解剖した。ハンターのお宅にもよく泊めていただき、学生とともに夜更けまで語り合ったものだ。こうして、次第にハンターとの信頼関係が生まれた。そのうち、岩手県との共同

とか助けたという真剣な気持ちに支えられていた。

そのときにいつも大切にしていることがある。それはその土地をよく知ること、生き物を自分の目でよく見ること、そして地元の人と交流することである。

自分が調査地とする場所は、よく歩いていつもどこにいてもわかるようにしなければならない。いまの学生は教科書のことばかり勉強するが、そんな知識は役に立たない。

【執筆プロファイル】一九四九年生まれ。東京都小平市在住。東北大学、東京大学を経て、現在麻布大学獣医学部教授。専門は動物生態学。宮城県金華山のシカに次ぐにある

野生シカの研究に挑む

東京都小平市 高槻 成 紀

作業が始まり、研究者と行政とハンターのよい関係ができた。九九年に『北に生きるシカたち』(どうぶつ杜)として公表することができ、それをきっかけにして私は東北大学から東京大学に転じることになった。

三年ほど前からは麻布大学という動物学の伝統のある大学に移って若い学生と野生動物の研究をしている。各地で野生動物の調査をしているが、

たない。それよりは本物の動物をよく知ることのほうがよほど大切だ。

また、概していまの若者は人とのつきあいが下手である。しかし動物の調査はただデータをとるだけではない。地元の人と交流することを通じて社会性も育つようになる。こうした教育姿勢は若い頃に五葉山に通いながら身につけたもの

モンゴルにおける著者近影。その研究者としてのスタートは五葉山に100回以上も訪問し、自然に向かい、地元の人々と交流したフィールドワークにある

地元のハンターにお世話になってシカのことを少しずつわかってきた。ハンターには頑固な人が

けでいっしょに調査をしてきた。そうして仕事ぶりは、同じ県民である大船渡や金石の農家の人々がシカの被害に苦しんでおられるのをなん

だけではない。地元の人と交流することを通じて社会性も育つようになる。こうした教育姿勢は若い頃に五葉山に通いながら身につけたもの

【執筆プロファイル】一九四九年生まれ。東京都小平市在住。東北大学、東京大学を経て、現在麻布大学獣医学部教授。専門は動物生態学。宮城県金華山のシカに次

モンゴルにおける著者近影。その研究者としてのスタートは五葉山に100回以上も訪問し、自然に向かい、地元の人々と交流したフィールドワークにある

リレー
エッセイ

